



今月は素材に行き詰まって、歴史とは関係のない短い気楽なお話ですが、昔の歌謡曲が隠しテーマになっています。コーヒーブレイクのつもりで読んでみて下さい。

**泣かないで** 「あんた、どうして涙が出ないの、あんたそれでも女優なの、もうすぐ中学生なんでしょう」

芳江が今日も鬼女になった。この女は一日に五回は鬼女に変身する。私はまだ小学生だけど、鬼女というのがどんなものか知ってるから怖くない。それに私が涙を流したところで、この芝居で客が感動するとは、誰が考えたって思えない。

私の名前は「**芦多愛菜**（あしたまな）。女優といっても、私が今稽古している『母帰る』という芝居は、団員がたった三人しかいない超売れない劇団の、超面白くない芝居で、温泉宿の大広間なんかで酔客相手のサービスにやる芝居だ。

「ほら、あんたと同じ名前の泣くのが上手なテレビの子役、あの子はお母さんが居なくなった時のことを考えると泣けるらしいわよ」

芳江がまた、私を苛立たせるようなことを言った。私の母は、いやオカンは私を捨てて出て行った。それもこの劇団の看板俳優だった男と一緒に。その看板俳優に惚れていた芳江は、それから何かにつけて私を苛めるようになった。

「私、お母さんなんかいないわよ」と、私は不貞腐れて言った。

「おっ、いいじゃないか今の感じ」と言ったのは、この劇団の座長で、作者で、演出家で、たった一人の男役だ。

「この芝居は子役の感情の表現が重要なんだ。お前、菊池寛の『父帰る』という芝居を知ってるか」と、座長は突然私に聞いた。

「知るわけないやろ。まだ小学生なんやから」

「まあそれはいい、この『母帰る』という芝居はだな、子供を捨てて出て行った母親が、やっぱり子供が恋しくなって家に帰ってくる。その時の子供の母親を恨んでいる気持ちと、帰ってきた母親を受け入れたい気持ちの、両方が同時に湧き上がって母親と呼べない、その辺の揺れる心の表現が重要なんだ」

「私のお母さん、何処にいるのよ？」

「目の前にいるじゃないか、好江がお前の母親役じゃないか」

「それに、戸籍上の母親でもあるってわけよね」

私は、現実と芝居の世界で分断されて痛めつけられる自分を奮い立たせると、芳江を見上げて言ってやった。この女は私のオカンが出て行った後、その後釜に座ってしまった。父親も逃げたオカンは忘れてしまって、さっさと芳江と結婚してしまっただの。子供の私に了解もなく。

すると、芳江は私を見下ろして、意地悪気な顔で言った。

「この子にそんな難しいこと言っても無理よ。涙ひとつ流せないんだから。だい

たいおかしいんじゃないの。まともに芝居なんか出来ないのに、どうして私の名前よりこの子の名前のほうが大きいのよ」

「名前が、どうしたっていうんだ？」

芳江は、「これよ」と言って、この芝居の予告がされている温泉宿のチラシをポケットから出して見せた。それには『涙、涙の感動劇、**芦多愛菜**があなたの心に訴える癒しの芝居』と大きく書いてあった。私は芳江の不満よりも、このチラシを見た客がテレビで見る子役が出るんじゃないかと、勘違いしないかと心配になった。あの子の名前は「**芦田愛菜**」、私の名前が一字変えただけのパクリだってことは誰でもわかる。この年でサギまがいの生き方を強いられた私の惨めな気持ちなど察もしないで、座長が言った。

「今は、子役の時代なんだよ。かわいい子役を見るとみんなホッとするんだよ。俺達の芝居は客に楽しんで貰うことが重要だろ、それにはまず子役なんだよ」

お前の下手な芝居なんか見に来る客なんていない、まあ、ストリップでもやったら男の客だけは見るかも知れへんけどねと言ってやろうと思ったがやめた、とりあえず好江は私の母親なんだから。

そんな調子で稽古は進まず、それでも本番の日はやってきた。

座長も芳江も、私に特別可愛い格好をさせた。二人ともこの面白くない芝居は、私の可愛い子役ぶりで売るしかないと割り切ったのだ。短い劇は大した盛り上がりもなく、ラストのシーンになった。私が拒んでいた母親を受け入れるシーンだ。私は諦めて家を出て行こうとする母親の芳江に、台本通りの声をかけた。

「……出て行かないで、戻ってきて……お母さん」

芳江は台本通りに立ち止まると、私のほうを振り向いた。不思議なことに芳江の目には涙が浮かび、その顔は鬼女ではなく優しい母親の顔になっている。すると稽古の時には一度も出なかった涙が、私の目にも浮かんできた。たぶん芝居が私たちを本当の親子にしたのだ。私は大きく「お母さん - !」と叫ぶと、芳江の胸に飛び込んだ。その途端に長い間忘れていた懐かしい気持ちが蘇ってきた。

力いっぱい抱きしめてくれた好江の身体は、甘酸っぱい母親の匂いがして、その腕にすがって泣きながら、私は台本にはないのに、何度も何度も「お母さん、お母さん !」と叫び続け、芳江もそんな私を抱きしめながら、泣き続けた。

気がつくと幕が下りて、その向こうでは大喝采が起こっていた。

「よかったじゃないか、さあ二人とも涙をふけよ。明日の晩もあるんだから」

座長が、いやお父さんが、私たちの背中を叩きながら、優しく言った。



**お別れ公衆電話** 「それって、老いらくの恋って言うんじゃないの」と、笑いながら佳代が言った。

時々ランチで使う公園のレストランだが、今日は私が誘ったためか、彼女はワインを注文して、少し赤い顔をしている。

「でも失礼なのよ。私のこと松山恵子に似てるって。ボンカレーなら知ってるけど、松山恵子の歌なんて知らないわよ」

「あら、松山恵子なら知ってるわよ。それはあなたには最大級の褒め言葉なんじゃないの」と、佳代は言うと、私の横のカメラバッグを指さした。

「それで、それがあなたと彼を結びつけた小道具と言う訳」

Aさんと私は半年ほど前にカメラ教室で知り合った。全くの初心者だった私はコンパクトカメラで参加したが、ファインダー越しに対象をしっかり捉える一眼レフの面白さを教えてくれたのは、ベテランのAさんだった。

たまたま家の方角が一緒ということもあって、車で送ってもらったりしているうちに、私たちは親しくなった。交換レンズ、アクセサリとAさんに選んで貰って買い揃えるうちに、私の心には、写真とAさんが次第に大きくなっていった。

「この公園もよく来るのよ。朝、早くに携帯で連絡しあって。お互い一人暮らしで、誰に拘束されることもないでしょ」

「それは、それは、二人で桜の花なんか撮ったりするんだ」

「いいえ、同じ写真が趣味といってもみんな専門分野があるのよ。私はもっぱら子供達かしら。小さな子供のスナップ写真」

私は、自分の子供に縁がなかったせいか、今頃になって子供にカメラを向けるのが楽しくて仕方がない。

「で、その人は何を撮るの？」

「男の人だから、決まっているでしょ。山とか風景とか」

でもAさんはどういう訳か、あまり写真は撮らない。そのかわり、私が写真を撮っている間、決まっていつも空を眺めている。それもいつも真剣な顔で。

「何、それ、現役の頃は気象予報士だったの？」

それは違うと思うけど、それが私の心に不安な影を落としていた。

それから暫くして、写真教室のグループで観光地に撮影に出掛けた帰りに、私はAさんと町のレストランで食事をした。もちろん、教室の人たちには気付かれないようにしていたが、それがまた二人だけの秘密のようで、私には楽しかった。

その夜、私はAさんに一泊旅行に誘われた。それはそれほど遠くない温泉地だったが、私はすぐに返事が出来なかった。そのかわり、私はAさんに気になっていることを聞いてみた。「どうして何時も空を見つめているのか」と。

すると、Aさんはやっぱりレストランの窓の外を眺めながら、「UFOを捜しているんです」と、不思議なことを言った。

「えつ、UFOって、あの空飛ぶ円盤のこと？」

「ええ、そう、その円盤です。僕は前に映画で見たんです。UFOに乗って、長い間行方不明になっていた人が帰ってくるのを。だから、僕の死んだ妻もUFOで帰ってくるんじゃないかと思って、時々、知らないうちに空を眺めていることがあるんです」

時々ですって、冗談じゃない、知らないうちにですって、冗談じゃないわ。

私と一緒にの時も、いつだって空を見つめているじゃない。

その夜、車で送るというAさんの言葉を断って、私は電車で帰った。駅の階段を重いカメラバッグを担いで上りながら、私はAさんが提案した一泊旅行の温泉

地に、昔、夫と一緒にいったことを思い出していた。ホームで私は携帯を出してAさんに電話しようとした時、突然、松山恵子の歌を思い出した。

「そうだった。お別れ電話は確か、駅のホームの公衆電話だった」

振り返ると、ホームの隅のベンチの横に、赤い色の公衆電話が置かれてあった。

---

## 6月12日 近江の城下町散策 近江八万

「傘さげて かげでうなずく プロポーズ」



NHKテレビ番組の投稿句から拾ったものですが、「傘さげて」がいいですね。この雨はたぶん、6月の花を咲かせて、人の心に潤いを与える優しい雨なんです。

小雨の中の水郷の町、懐かしい時間が流れる煉瓦塀、大正モダンの小学校、二階が電話局だった郵便局、コーヒーの香りが漂うミュージアム、淡い空気に溶け込んだような湖と近江の大地と比良の山々、今日の天気の様は、そんな近江八幡の風景を6月のやはらかな雨に包んで見せてくれました。

近江八幡に来ると、小さい頃にいつも見ていた風景に出会うような気がするんですが、それはたぶんヴォーリズの建物とメンソレータムのせいでしょうか。僕の町には今ではレトロと呼ばれる建物が沢山あったし、家の薬箱には看護婦さんマークの丸い缶のメンソレータムがあって、確かにそれは小さな昭和だった。

「何言ってるんですか、私はいつもメンソレータムを使っていますよ」

そうでした。メンソレータムはまだまだ頑張っているんです。でも、あの看護婦さんマークは、もっとお姉さんだったような気がするんだけど、違うかな。

京街道門前通りのローソク屋の山中屋さんで売っている、願成就寺さんの「日本一願いが叶う絵札」は一枚百円、絵札には願い毎の種類があって、「安産祈願」や「合格祈願」、「良縁祈願」、「商売繁盛」、「家内安全」、「健康祈願」、「病気平癒」……等々、全部で12種類で、セットで買うと千円とお得用になっています。この中から自分にあった絵札を選んで願い事を書き、願成就寺さんの壁に貼ってもらくと、必ず叶えられるという、なんと有難いお札なんです。

お得用セットは、どういう人が買うのか考えてしまうんですが、これはたぶん家族割引みたいなものでしょう。お父さんは「商売繁盛」、お母さんは「家内安全」、お嫁さんは「安産祈願」、お姉ちゃんは「良縁祈願」、お兄ちゃんは「合格祈願」、おじいちゃんは「健康祈願」、おばあちゃんは「病気平癒」…えっ？、病気じゃない？、ということは「恋愛成就」？、そうですか、最近のおばあちゃんは、皆さんお若くてお元気ですから、これがやっぱりベストセラーだそうです。

「たーちゃんが心を入れかえて家族の元に戻ってきますように、私と元の夫婦になりますように」。願成就寺さんで見つけた願いごと。絵札の御蔭で、「たーちゃん」は今頃家に帰って、この人と仲良く暮らしているんです、きっと。